

のしろ児童館だより

小松市北浅井町へ29

TEL・Fax 22-6430

平成 29 年 12 月号

とも子ちゃんシリーズ(11)

運動会が終わって、鉄男君はお母さんと一緒に帰っていきました。少し右足を引きずるようにして歩いていきました。運動会の次の日は日曜日でした。公園でとも子ちゃんは妹の陽子ちゃんと遊んでいました。今日は、妹の陽子ちゃんとブランコで遊ぶ約束をしていたのです。陽子ちゃんはお姉さんのとも子ちゃんに、ブランコを押してもらうのが大好きなのです。昨日の運動会では陽子ちゃんに一杯応援してもらったので、今日は一杯押してあげようと、とも子ちゃんは考えていたのです。「15・16・17……」「もっと高くおして……」「よーし！18・19・20……」「ワー高い」二人は笑いながら遊んでいました。その時です。うしろから「とも子」と呼ぶ声がしました。急に呼ばれたので、びっくりして後ろを振り返ると、そこには鉄男君がいました。「ああ、びっくりした！」と、とも子ちゃんが言うと、「ごめん。おどかすつもりじゃなかったんだ。……楽しそうに遊んでいるんで……声を掛けにくかったんだ。」と鉄男君が言いました。すると急に陽子ちゃんが「あっ、この人、昨日のリレーで転んだ人だ！」と声を上げました。驚いたのはとも子ちゃんです。そんなことを言ったら、鉄男君はいつものように怒って暴れだすかもしれません。しかし鉄男君は「そうだよ。そして君のお姉ちゃんに助けてもらったんだよ……そのお礼を言いたくて、声を掛けたんだ。……昨日はありがとう。」はっきりと鉄男君は言いました。「足はもう大丈夫なの？」とも子ちゃんは聞きました。「ああ、大丈夫……もう痛くないから……」

そんな話をしていると道路の方から「鉄男！早くもどってこい！」と怒鳴るような声が聞こえました。そちらを見ると、鉄男君が乗ってきた自転車と、もう一台の自転車が止まっています。そこには、中学生らしい男の人がいます。鉄男君はいつも外で遊んでいるので、色は黒いのですが、その男の人は「白い色」が目立っていました。小さい声で「わかった……」と答えると、鉄男君はもどっていきました。

お昼ご飯の時にとも子ちゃんは、さっきの出来事をお母さんに話しました。最後まで話を聞いていたお母さんは、とも子ちゃんにこんな話をしてくれました。「お母さんはその中学生の男の子を知ってるわ。それは鉄男君のお兄ちゃんよ。どうい理由かはよく知らないけれど、中学になって学校に行けなくなったそうなの。あまり外にも出ることもなくなっているらしいのよ。」

午後も、とも子ちゃんは陽子ちゃんと一緒に公園に遊びに行きました。しばらく砂場で遊んでいると、後ろから「とも子」と呼ぶ声がしました。午前と同じ声なので、「鉄男君」の声だということがわかりました。とも子ちゃんが後ろを振り返ると、そこにはやはり鉄男君が立っていました。思わずとも子ちゃんは道路の方を見ました。そこには鉄男君の自転車が一台停めてあるあるだけでした。「さっきの人は、お兄ちゃん？」とも子ちゃんは勇気を出して聞いてみました。「そうだよ、兄ちゃん」しばらく時間を置いて、鉄男君は話をつづけました。「僕の兄ちゃん、あんまり学校に行ってないんだ。そんで、家にいるんだ。だから家に帰っても、お兄ちゃんの言うことをきかないと、ゲームをやらせてもらえないし、時々は殴られる。」思わずとも子ちゃんは「それなら、お父さんに言えばいいじゃないの。」「そんなことをしたら、次の日、もっとひどい目にあわされる……仕方ないんだ……兄ちゃんもつらいのは、僕もわかってるんだ。」最後の言葉は、自分に言い聞かせるようにも聞こえました。

それを聞いて、とも子ちゃんはもう何も言えなくなり、下を向いてしまいました。すると鉄男君は「兄ちゃんと同じで、僕も自分のこと好きになれない時があるけど、きのう最後まで走れた自分はうれしかった……それだけをとも子に言いたかったんだ。……さよなら。」と言って、走って帰っていきました。